

詠風集

九月号



花鳥諷詠®



令和3年9月■第402号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	木村 享史 2
	稲畑廣太郎 4
虚子研究 『六百五十句』研究 (20)	7
虚子研究 虚子宛書簡を読む (二十六)	
明治二十五年五月六日虚子宛桧垣精三郎書簡	
.....	小林 祐代14
この人の作品	横田美佐子21
一頁の鑑賞.....	和田 和子22
	原田 佳織23
風報	24
俳句カレンダー 特別座談会	26
新刊紹介	28
令和四年 (2022年) 俳句カレンダー募集句入選者	29
地区行事開催日程表	31
編集後記	32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

● 木村享史 選

特選五句

水打つて一番星を濡らしけり

大牟田 石橋 武子

随分と父の草笛待たされて

東京 平野 緑

風の傷残したるまま麦熟す

刈谷 青山 和生

先づは声聞きて安堵や水見舞

神戸 岸本 美恵

登山靴共に登りし形見かな

白石 鈴木 鮎子

二句短評

一句目——水を張った桶と柄杓を手に、下駄を突っ掛けて出た庭で、夕空に向かつて大きく水を打つ。

長い柄の杓から放り出された水が、生まれたばかりの一番星へ広がって消えた。端的に描写された佳什。

二句目——家族連れ立っての散歩の途中か、立ち止まった父親が草笛を聞かせてやろうと、作り始めた。

それが失敗ばかりで一向に鳴ってくれない。必死の父親を見守る家族、結局はどうだったかを知りたい。

入選六十句

籠居の庭すつきりと草を引く 金沢 中村 曜子

木洩日のまたたく如し苔の花 鹿児島 青野 迦葉

古茶淹れて会話ふだんの心かな 名古屋 中野ひろみ

初めから置かれたやうに落椿 高崎 並木 秋野

病む友の招き新茶の封切ると 小樽 山下 節子

花吹雪父の名のある忠魂碑 高松 茅田 照代

潮仏ひねもす洗ふ卯波かな 神戸 上岡あきら

虚子像へ届く水音夏に入る 横浜 竹田登代子

ビール追加負くる気がせぬタイガース 香川 湯川 雅

清流の五月の水に絵具溶く 高知 栗坂 海馬

園児らにとりかこまれし毛虫かな 長岡 桑原 幸子

枇杷買つて朝の散歩を打切りに 静岡 剣持せつ子

新緑に抱かれ湖のカフェテラス 神戸 柏原 憲治

牡丹の崩れむとして風待てり 福知山 松山 牧子

古籐椅子振り返らずに今を生き 横浜 秋間 玲子

薰風に暝りをれば授かる句	熊本 渡邊佳代子
通院も今日でおしまひ風光る	福山 佐藤 浩子
貼り紙に迷はず買ひし柏餅	松山 三好美美枝
山鳩の機嫌良き朝草を引く	高松 もりおかともこ
菜園に何やら植ゑて六月に	北海道 高橋とも子
形見分け黴の匂ひの中にゐて	市原 飯塚 咲子
草笛や寄り道せずに帰れぬ子	神戸 横山 脩子
京の土つけて筍届きけり	堺 吉田 敦子
津軽富士映らぬ代田なかりけり	平川 丹野 慶子
飛び退いてごきぶり退治人任せ	徳島 吉田 有子
戻りきて何より涼し普段着は	高松 福家 敬子
生かされて生き永らへて新茶汲む	高松 島谷うた子
迂回路は曲り曲りて木下闇	伊賀 子日 康子
若人と語る未来や夏に入る	小千谷 大矢あきら
明易や恙無きことありがたく	吹田 久留島信子

母の忌を待たず散りゆく夏椿	朝倉 井出ちくの
夕焼の消えて残りし港の灯	福岡 山口 裕子
五月晴れ雲探しても探しても	豊田 杉本 淑代
我も並ぶワクチン接種五月晴	長岡 安原 葉
二センチも背丈縮んで更衣	さぬき 原 道子
端居して会ひたき人の皆遠し	高松 岩瀬 良子
切り株の根元膨れて蘂ゆる	鳥取 西村 史子
子ら描きし母の絵ならぶ駅五月	福津 柴田佳津子
遠州の昔の上司より新茶	徳島 遠藤 和良
火山灰の向き今日は東へ梅を干す	鹿児島 徳永 春乃
晚酌はひと日の褒美紺浴衣	東京 大和田博道
新緑の古利は風の通り道	那珂川 池田ひさ絵
母の忌の空広々とほととぎす	福島 遠藤 星乃
風鈴を吊せば風の待ちし如	朝来 牧田登志子
籐椅子やゆつくり柱時計鳴る	高松 和泉 金子

● 稲畑廣太郎 選

特選五句

番傘を差して五月雨音に知る

横浜松 永朔 風

子ら描きし母の絵ならぶ駅五月

福津 柴田 佳津子

初蝶に選ばれてゐる鉢のもの

米子 遠藤 裕子

口笛が上手草笛それ以上

鹿見島 山本 誠子

五月晴雲探しても探しても

豊田 杉本 淑代

二句短評

一句目——最近では日本旅館等以外ではすっかり見ることが出来なくなつた番傘であるが、独特の魅力がある。

特に雨が降つてきた時に差すとその油紙の独特な香りと、何といつてもその紙を弾く雨粒のばらばらという乾いた音に風情を感じる。その音に季節の美しさを感じる。

二句目——五月といえやはり母の日を思い浮かべる人は多いだろう。この母の日を祝うイベントとして鉄道会社が母親の絵を募集したのだろう。そして送られて来た母親の絵を駅に飾るのである。この洒落たイベントを「母の日」の季題ではなく「五月」としたところが秀逸。

山陵へ玉砂利を踏む木下閣	鹿見島	松尾千代子
薬狩とて庭先のものばかり	東京	不破 澄子
みちのくの山河美し風五月	熊本	今福 公明
松蟬や山湖小波きらめかせ	倉敷	江原由美子
幸せは薔薇のアーチをくぐるとき	白山	水上 栄
大山を遠く押しやり夏霞	浜田	小嶺ヤス江
梅雨晴やコロナ接種の列に着く	高松	星加 宏美
ででむしを歩道の端へ戻しやる	島原	典子
ワクチンの接種の列に拭ふ汗	鹿見島	亀割 芙蓉
疫病と戦ふ地球月涼し	広島	古川 東代
父の日の三人の娘の贈物	姫路	中西 あい
園児らの声は鳥語に風薫る	山形	加藤わか子
丸めれば此んな小さき夏帽子	札幌	荒松 青嶺
空よりも青し植田の中の空	前橋	戸所 理栄
古すだれ捲けばまっすぐ風の道	鹿見島	岡村るみ子

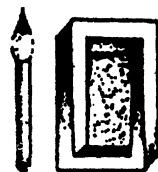
入選六十句

天を突く麦の穂先の磨かれて 高崎 清水 教子
 風の香と土の香満ちて草若葉 東京 崎川 晶子
 草笛の進軍ラッパ路地を行く 東京 吉里ひとみ
 筍を掘る一点の勘所 金沢 北川まつ子
 蝙蝠に空を返して吾子帰る 神戸 石角 節子
 蠅の書に埋もれ商ふとも見えず 神戸 島崎すずらん
 螢火を追ふまなざしに闇深む 香川 福家 市子
 虹消えて空は青さを失ひぬ 岡山 伴 明子
 真青なる空あれば足り野に遊ぶ 札幌 押野 美江
 麦の秋大字小字一色に 糸島 藤原 泰子
 街路樹の長き影踏む日永かな 加賀 出島 達子
 新樹晴杜の音とは風の音 柏原 早川 水鳥
 滝壺へ落ち切つて水安らへる 白岡 細井 路子
 筍の消息土の動きたる 神戸 影山 里美
 あと一句竹の皮脱ぐまでを待つ 浜田 田中由紀子

形見分け蠅の匂ひの中にゐて 市原 飯塚 咲子
 水打つて一番星を濡らしけり 大牟田 石橋 武子
 老鷺の声直線となる山湖 伊万里 大久保花舟
 紫陽花の二人で見れば違ふ色 山形 布川 國雄
 高原の眠りの底に青葉木菟 金沢 森田 康夫
 登山靴共に登りし形見かな 白石 鈴木 鮎子
 母の忌を待たず散りゆく夏椿 朝倉 井手ちくの
 透明の小目高すでに影を置き 高松 久本 照代
 曲りゆく音高ぶりて夏の川 北海道 安田 豆作
 夕焼の消えて残りし港の灯 福岡 山口 裕子
 卯浪寄せ夕日呑み込む日本海 金沢 三島由紀子
 先端は風の真ん中今年竹 芦屋 山村千恵子
 老鷺が退屈させぬ真昼時 加賀 仲谷美枝子
 観潮や潮の段差越えて渦 高松 佐々木 新
 新緑の古刹は風の通り道 那珂川 池田ひさ絵

眩しさの蒼もりあがり初夏の海 高松 岡田 貞幹
 小さき風 大きく放し若楓 浜田 高村美都子
 植田まだ水のそよぎを見せてをり 松江 三浦 純子
 海よりの黒南風山を裏返す 大牟田 介弘 紀子
 籐椅子やゆつくり柱時計鳴る 高松 和泉 金子
 切株に弁当預け野に遊ぶ 小諸 清水 節子
 誘蛾灯音を弾いて弾かれて 伊賀 松村 咲子
 風しらず散ること知らぬ水中花 小樽 岩崎スイ子
 句心の取り囲みをり蛇の衣 松山 門田 智子
 終日を四葩咲く辺に画布立てて 大阪 今村久美子
 消息のやうに届きし新茶かな 袋井 湖東 紀子
 五月闇襖絵の鯉泳ぎ出し 尼崎 魚住富美子
 開発に取り残されて代を搔く 名古屋 山口こひな
 花菖蒲色を分かちて渡り石 岡山 山口喜代子
 放たれてヨットは風のものとなり 芦屋 田村恵津子

大いなる緑蔭つつむベビーカー 枚方 高木 雅恵
 沙羅の花明日なき白の穢れなく 伊勢崎 村上 節子
 牡丹の崩れ音なき音を積む 高松 浅野クニ子
 知らぬ間に育つ二人目天瓜粉 香川 三宅久美子
 草原と海原揺るるハンモック 米子 中村 襄介
 悲しみも水と均して代を搔く 島原 荒木アヤ子
 夏帯をゆるりきりりと大女将 武蔵村山 福留 和江
 ラベンダー風の流れのままに咲く 東京 飯島 千青
 初夏や路地駆け抜ける下駄の音 横浜 島村美沙子
 十葉の埋めつくして昼の闇 横浜 工藤喜美子
 緑蔭の風を掴んで放さざる 鳥取 椋 則子
 梅雨ぐもり地球に音の無きごとく 宇佐 大森美代子
 ほうたるの竹の闇より川に照る 大阪 西川寿賀子
 風鈴の今年の音色買ひ求む 島根 森口 時夫
 揚羽蝶一指舞ひに戻り来る かほく 西谷 笛秋



編集後記

秋の蝶飛び行く園の広さかな

虚子

オリンピックが終わり、暑い日が続いていきます。台風の被害に見まわれた方々にお見舞い申し上げます。

印刷所がお盆休みになる前にとこの編集後記を書いていきますので、この号をお届けする頃には暑さも収まり、災害も争いもコロナを含めた疾病もない世の中になっていることを願っています。

本誌とほぼ同時期に、来年の俳句カレンダーの入稿も終わりました。判型やデザインを大きく変え、より現代にマッチさせたものになりました。素材選びは環境にも配慮。配布の扱いが格段に良くなり、郵送料も低く抑えることができるようになりました。ぜひ手にとってお楽しみください。

募集句のみとなりました全国大会は皆様の御協力でたくさんの投句が集まりました。感謝申し上げます。結果はあらためて誌面でもご報告申し上げます。来年は北海道での開催となります。三年分のお楽しみとなりますように。

初心者のための協会事業、卯浪俳句教室の一部で実験的にリモート合同句会を開催しました。画面越しに久々に他教室のメンバーとも顔を合わせることでできました。

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者	
12月号	9月20日	稲畑汀子	今井肖子
1月号	10月20日	木村享史	山本素竹
2月号	11月20日	稲畑汀子	小川みゆき
3月号	12月20日	木村享史	抜井諒一

花鳥諷詠九月号(通巻第四〇二号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和三年九月一日

発行人 稲畑汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

シャンブル笹塚二丁目一八〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二